

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

クイズです。選択肢は二つ。あなたならどうするかを考えてください。

質問1 ある映画のDVDをレンタルして一人で見ることになりました。評判の映画でしたが、見ていてすぐにつまらない映画だと分かりました。あなたは映画の途中でDVDを見るのをやめて、他のことをしますか？

- A 最後まで見る
- B 他のことをする

では、次の場合にはどうでしょうか。同じように選択肢は二つ。あなたならどうするかを考えてください。

質問2 懸賞に当選して映画のDVDレンタル券が景品として送られてきました。あなたは一人でその映画を見ることにしました。評判の映画でしたが、見ていてすぐにつまらない映画だと分かりました。あなたは映画の途中でDVDを見るのをやめて、他のことをしますか？

- A 最後まで見る
- B 他のことをする

(中略)

最初の質問で「最後まで見る」を選び、2番目の質問で「他のことをする」を選ぶという典型的なパターンについて解説します。

まず、この映画は2時間で、DVDレンタル料は400円とします。典型的なパターンを選ぶ人は、最初の質問では自分でお金を払ったから映画を最後まで見るけれども、2番目の質問では自分でお金を払ったわけではないので他のことをするということですが、表のように考えるとどうでしょうか。

<p>【質問1】(レンタル料400円)</p> <p>①レンタル料400円を自分で払って、映画を最後まで見た場合</p> <p>(a)レンタル料400円+退屈な2時間</p> <p>②すぐに見るのをやめた場合(少なくとも退屈なことよりも他のことができる)</p> <p>(b) <input type="text" value="X"/></p> <p>【質問2】(レンタル料0円)</p> <p>①映画を最後まで見た場合</p> <p>(c)レンタル料0円+退屈な2時間</p> <p>②すぐに見るのをやめた場合(少なくとも退屈なことよりも他のことができる)</p> <p>(d)レンタル料0円+有意義な2時間</p>
--

表

二つの質問から四つの組み合わせが出てきます。四つの式をよく見ると、質問1では①(a)と②(b)に「レンタル料400円」が含まれていますが、これはすでに支払ってしまったので、映画を最後まで見ても、すぐに見るのをやめても400円は戻ってきません。ということは、質問1は、「退屈な2時間」と「有意義な2時間」のどちらを選ぶかという組み合わせになります。一方、質問2ではレンタル料はゼロなので、「①(c)退屈な2時間」と「②(d)有意義な2時間」のどちらを選ぶかということになることは明らかです。つまり、お金を払っても、払わなくても、「最後まで見ると退屈な2時間」「すぐに見るのをやめると有意義な2時間」という組み合わせには変わらないのです。したがって、質問2で「すぐに見るのをやめる」という選択をした人は、質問1でも「すぐに見るのをやめる」という選択をしたほうが合理的になるはずですが。

では、なぜそのような合理的ではない選択をしたかと言えば、

映画好きの人は、たとえつまらない映画であっても、お金を払ったかどうかに関係なく、「最後まで見る(A・A)」という選択をするでしょう。また、たとえお金を払ったとしても、つまらない映画を見るのは時間をもつたいたないと考える人は、「他のことをする(B・B)」を選ぶはずですが、つまり、合理的な意思決定ができる人であれば、必ず「A・A」か「B・B」の選択になるということです。しかし、少なからぬ人は、自分でお金を払ったからといっていいかもしれない、最後まで見れば取り返せると思ってしまう、「A・B」というパターンを選択してしまう。

すでに支払ってしまったって取り返すことができない分を、経済学では「 sunk cost (埋没費用) 」と言います。多くの人が間違った直感的意思決定をしてしまうのは、「 sunk cost 」への対応を間違えているからだとおもっていいかもしれません。お金だけではなく、もう取り返せないものはあきらめることが大事です。

日本には「覆水盆に返らず」ということわざがありますが、どの選択肢を選んでもすでに支払った費用は戻ることなく、戻ってこない費用をこれからの選択の理由に入れる必要はないということです。

(中略)

ここで、 sunk cost の一つの例を紹介しましょう。ここで、 sunk cost の一つの例を紹介しましょう。出典は福沢諭吉著『福翁自伝』です。彼は大阪の適塾でオランダ語を勉強していたのですが、横浜で店を出していた外国人と言葉が通じないし、看板の文字も読めなかった。その外国人はイギリス人だったからです。

「今まで数年の間、死に物狂いになってオランダの本を読むことを勉強した。その勉強したものが、今は何にもならない。商売人の看板を見ても読むことができない。まことにつまらないことをしたわいと、実に落胆してしまった。」(出典『福翁自伝』以下同)

しかし、彼はそこで終わりませんでした。

「けれども決して落胆していられる場合ではない。(略)あれは英語に違いない。今我国は条約を結んで開けかかっている。であればこの後は英語が必要になるに違いない。洋学者として英語を知らなければとても何にも通することができない。この後は英語を読むよりほかに仕方がない。横浜から帰った翌日に、一度は落胆したが同時にまた新たな志を発して、それから以来は一切万事は英語だ、と覚悟を決めた。」

当時の蘭学者の多くについて、福沢は次のように書いています。

「『数年の間刻苦勉強した蘭学が役に立たないといつて、まるでこれを捨ててしまつて英学に移ろうとすれば、新たに元の通りの苦しみをもう一度しなければならぬ。』というものだった。まことに情けないつらい話である。たとえば五年も三年も水泳を勉強して、ようやく泳げるようになったところで、その水泳をやめて今度は木登りをはじめようというのと同じことで、以前の勉強がまるで無駄になる、とこう考えたものだから、いかにも決断が難しい。」

例えば、村田蔵六(後の大村益次郎)は次のように言つたといひます。

「無駄なことをするな。僕はそんな物は読まない。必要ない。何もそんな困難な英書を、苦勞して読むものはないじゃないか。必要な書はみなオランダ人が翻訳するから、その翻訳書を読めばそれでたくさんじゃないか。」

このエピソードから二つの教訓を得ることができます。

一つは、オランダ語の勉強が「サンクコスト」だということ。福沢諭吉は正しく認識したということです。福沢諭吉は、オランダ語を一生懸命勉強したからといつても、新しい社会に役立ちそうにないオランダ語にしがみつくのではなく、英語にしなければいけないということを理解したわけです。

しかし、当時の多くの蘭学者は、せつかく一生懸命にオランダ語を勉強したので、「サンクコスト」を取り返したいからということ。オランダ語を続けたいと思つたわけです。取り返せないものを取り返せると思つて、合理的でない選択をしがちであることを「サンクコストの誤謬」と言います。

もちろんオランダ語だけを続けて活躍した人もいますが、その後の福沢諭吉の大活躍を考えると、「サンクコスト」を無視できることがとても大事であることが分かります。

もう一つのポイントは、オランダ語の勉強がまったく無駄だったかということ。そうでもないということ。福沢諭吉は、次のように書いています。

「最初私たちが蘭学を捨てて英学に移ろうとするとき、『これは数年の勉強の結果を空しくすることで、生涯二度の艱難辛苦だ。』と思つたのは大間違いの話で、実際を見ればオランダ語といひ英語といひも等しく外国語にして、その文法もほぼ同じであつたので、蘭書を読む力は自然と英書にも適用されて、けつして無駄でなかつた。水を泳ぐと木に登るとのようになつた別のように考へたのは、一時の迷いであつたということを見ました。」

他の勉強をするときに、それまで勉強してきたことがまったく無駄かといふと、そうではなく、共通しているところは必ずあります。新しいことにチャレンジするといつても、それまでやってきたことがすべて無駄になるわけではなく、違うように見えても、実はすべて「埋没」しているわけではないということも大事な教訓です。

(大竹文雄『あなたを変える行動経済学』による)

問一 表の X にあてはまる言葉を答えなさい。

問二 Y にはどのような言葉が入りますか。問題文中の言葉を使って答えなさい。

問三 線部1「落胆してしまつた」とありますが、それはどのような経験によりですか。解答らんに合わせて五十字以内で答えなさい。

問四 線部2「元の通りの苦しみ」とありますが、これはどのようなものですか。答えなさい。

問五 線部3「オランダ語の勉強が『サンクコスト』だ」とありますが、これはどういうことですか。答えなさい。

問六 線部4「オランダ語の勉強がまったく無駄だったか」といふと、そうでもない」とありますが、なぜそう言えるのですか。理由を答えなさい。

二 高校生の紗英は、同級生から「さえこ」という愛称で親しまれている。活け花教室で中学の同級生朝倉くんが活けた見事な花に心奪われた紗英は、自分ならではの花を活けたいと強く思い、ある日、型を無視して花を活けてみた。先生にひどく怒られた紗英は、型通りに花を活けることに疑問を覚える。それに続く次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

「あたしの花ってどんな花なんだろう。」

濡れた髪を拭き、ほうじ茶を飲みながら漏らした言葉を、祖母も母も姉も聞き逃さなかった。

「紗英の花？」

私らしい、といういい方は避けようと思う。自分でも何が私らしいのか、今はよくわからないから。

「あたしが活ける花。」

「紗英が活ければぜんぶ紗英の花じゃないの。」

母がいう。私は首を振る。

「型ばかり教わってるでしょう、誰が活けても同じ型。あたしはもつとあたしの好きなように。」

といいかけて、私の「好き」なんて曖昧で、形がなくて、天気や気分にも左右される、実体のないものだと思う。そのときそのときの「好き」をどうやって表せばいいんだろう。

母は察したように穏やかな声になる。

「そうねえ、決まりきったことをきちんきちんとこなすっていうのは紗英に向いてないかもしれないわねえ。」

そうかな、と返しながら、そうだった、と思っている。すぐに面倒になってしまう。みんながやることなら自分がやらなくてもいいと思ってしまう。

「でもね、そこであきらめちゃだめなのよ。そこはすごく大事なところなの。しっかりと身につけておかなきゃならない基礎って、あるのよ。」

「根気がないからね、紗英は。」

即座に姉が指摘する。

「ラジオ体操、いまだにぜんぶは覚えてないし。」

「将棋だってぜんぜん定跡通りに指さないし。」

祖母がびしやりといふ放つ。

「だから勝てないんだよ。」

「いいもん、将棋なんか、勝てなくてもいいもん。」

姉たちは将棋も強かった。たつたひとつの玉を目指して一手ずつ詰めてゆく。ふたりが盤の上できれいなヒタイをつきあわせ、意識を一点に集中させてゆくと、傍にいるだけで息が苦しくなった。その点、囲碁はいい。盤上のあちこちで陣地の取り合いがある。右辺を取られても左辺が残っている。石ひとつでもケイセイが変わる。将棋よりずっと気持ち良かった。

「囲碁でもおんなじ。定石無視してるから強くなれないのよ。いつつもあつという間に負かされてるじゃない。長い歴史の中で切磋琢磨してきてるわけだからね、定石を覚えるのがいちばん早いよ。いつつもあつという間に負かされてるじゃない。長い歴史の中で切磋琢磨してきてるわけだからね、定石を覚えるのがいちばん早いよ。」

「早くなくてもいい。」

ただ楽しく打てればいい。そう思って、棋譜を覚えてこなかった。教え切れないほどの先人たちの間で考え尽くされた定石がある。それを無視して一朝一夕に上手になれるはずもなかった。

「それがいちばん近いの。」

「近くなくてもいい。」

姉はよく言葉を探す。

「いちばん美しいの。」

美しくなくてもいい、とはいえなかった。美しくない囲碁なら打たないほうがいい。美しくないなら花を活ける意味がない。

「紗英はなんにもわかってないね。」

祖母が呆れたようにため息をつく。

「型があるから自由になれるんだ。」

自分の言葉に一度自分でうなずいて、もう一度繰り返した。

「型があんたを助けてくれるんだよ。」

はつとした。型が助けてくれる。そうか、と思う。そうだったのか。毎朝毎朝、ハンで押したように祖母がラジオ体操から一日を始めることに、飽きることはないのかと不思議に思っていた。そうじゃなかったんだ。毎朝のラジオ体操が祖母を助ける。つらい朝も、苦しい朝も、決まった体操から型通りに始めることで、一日をなんとかまわしていくことができたのかもしれない。楽しいことばかりじゃなかった祖母の人生が型によってスクワれる。そういうことだろうか。

「いちばん突き詰めていくと、これしかない、というところに行きあたる。それが型というものだ。私は思ってるよ。」

今、何か、ぞくぞくした。新しく、古い、とても大事なことを聞いた気がした。それはしばらく耳朶の辺りをぐるぐるまわり、ようやく私の中に滑り込んでくる。

型って、もしかするとすごいものなんじゃないか。たくさんのお恵にハグクまれてきた果実みたいなもの。囁いてもみないなんて、あまりにももったいないもの。今は型を身につけるときのなかもしれない。いつか、私自身の花を活けるために。

今は修業のときだ。そう思ったら楽しくなった。型を意識して、集中して活ける。型を身体に叩き込むよう、何度も練習する。さえこも紗英も今はいけない。型を自分のものになりたい。いつかその型を破るときのために。

「本気になったんだ。」

私の花を見て、朝倉くんがつぶやいた。

桜ナミキの土手の上を、自転車を押していく。朝倉くんが川のほうを見ながら前輪ひとつ分だけ前を行く。茴香がムゾウサに新聞紙にツツま

れて籠にある。車輪からの振動で黄色い花が上下に細かく揺れている。

「それで今日の花なんだね。さえこが本気になると、ああいう花になるんだ。」

ちよつと振り返るように私を見て、朝倉くんがいう。

「なんだか、意外だ。」

意外だなんてよくいう。私のことなんか知らないくせに。ふわふわのところしか見てなかったくせに。でもさ、といて朝倉くんは自転車と一緒に足を止める。川原のほうを指さして、下りる？ と目で訊く。

「意外だったけど、面白くなりそうだ。」

土手から斜めに続く細い土の道を、勢いよく下りはじめる。私は後ろからそろそろと下りる。自転車のハンドルを握って、勢いがつかないよう力を込める。一步一步踏みしめて、それでも最後は駆け足になる。自転車が跳ね、籠から茴香が飛び上がった。

下りきったところに朝倉くんはスタンドを立てる。私が隣に自転車を停めるのを待って、川縁のほうへ歩き出す。

「さえこが本気になるなんて。」

「さえこ、って呼ばないで。ほんとうの名前はさえこじゃないの。」

朝倉くんがゆつくりとこちらを向くのがわかる。私は川面が新しくなったり古くなったりしながら流れていくのを眺めている。

「知ってるよ。」

「じゃあ、ちゃんと名前前で呼んで。これがあたし、っていえるような花を活けたいと思ってるの。さえこじゃないの。」

「うん。」

「さえこじゃなくて、紗英の花。まだまだ、遠いけど。」

さえこの花は、といいかけた朝倉くんが、小さく咳払いをして、いい直す。

「紗英の花は、じつとしていない。今は型を守って動かないけど、これからどこかに向かおうとする勢いがある。」

「型通りに活けたの？」

聞くと、大きくうなずいた。

「俺、ちよつとどきどきした。」

どきどきした、と朝倉くんがいう、その声だけでどきどきした。朝倉くんがまた川のほうを見る。太陽が水面にハンシャしてまぶしい。

(宮下奈都「まだまだ」による)

*注 棋譜——囲碁や将棋の対局での手順を記録したもの。

耳朶——耳たぶのこと。

茴香——セリ科の多年草。良い香りがする。

問一——線部A～Iのカタカナを漢字に改めなさい。

問二——線部1「決まりきったことをきちんきちんとこなす」とありますが、具体的にはどのようなことですか。問題文中にあげられた例の中から一つ答えなさい。

問三——線部2「将棋よりずっと気持ち楽だ」とありますが、それはなぜですか。理由を答えなさい。

問四——に入る言葉を問題文中から漢字二字でぬき出しなさい。

問五——線部a・bにある「型」は、「私」にとつての意味が変化しています。それぞれの意味する内容を説明しなさい。

問六——線部3「本気になる」とありますが、これはどういうことですか。これより前の問題文中の言葉を使って答えなさい。

問七——線部X・Y「紗英の花」とは、それぞれどのような花のことですか、答えなさい。

問八——線部4「その声だけでどきどきした」とありますが、それはなぜですか。理由を答えなさい。

三 次の詩を読んで、後の問いに答えなさい。

プラネタリウム

三角みづ紀

あの子の顔には
星が散りばめられている
まっすぐ見ると
眼が痛くなるから
いつも直視できない

自転車で帰宅していたら
あの子に追い越される
何か言って 手を振って
一瞬のことだから
いつも流れ星だ

寝つけないでいたら
母がホットミルクをさしだす

ベッドに横たわって
あの子を思いうかべたら
[]が星で満ちる
眼が痛くなるから
あわてて瞼をとじた

脳裏も満天で
明日もあの子に会うだろう

あの眩しさを
直視できない

明日は三つ編みじゃなくて
ポニーテールにしてみらおう

(『どこにもあるケーキ』による)

問一 — 線部1「いつも直視できない」とありますが、これはなぜですか。理由を答えなさい。

問二 — 線部2「いつも流れ星だ」について、次の問いに答えなさい。

A 「あの子」のどのような様子をたとえていますか。具体的に答えなさい。

B 「あの子」は自分にとってどのような存在だと考えられますか。「流れ星」という表現をふまえて答えなさい。

問三 []に入る言葉として最も適当なものは何ですか。詩の題を参考にして、次のア～オから選び、記号で答えなさい。

- ア 記憶
- イ 想像
- ウ 天井
- エ 布団
- オ 夜空

問四 — 線部3「脳裏も満天で」について、次の問いに答えなさい。

A これはどういうことですか、答えなさい。

B この下に補うとすればどのような言葉がふさわしいですか。詩の中から五字でぬき出しなさい。

問五 この詩の主人公はどのような存在としてえがかれていますか。次の説明文の []に入る内容を答えなさい。

「あの子」と対等の関係を持ちたいと思いつつも、 [] という幼さを持った存在としてえがかれています。

